

「生きる力」を育てる音楽教育

指導主事 樋口 博史
Higuchi Hirofumi

要 旨

人間が生きていくには、いろいろな力を要する。かつて「読み・書き・そろばん」が学問の代名詞とされた時代があったが、それ以後、人間が生きていく上で必要とされる力について、いろいろ模索されてきた。知識偏重の時期を経て、21世紀は「心の時代」と言われ、心を豊かにする教育について考察されている。我々は今、生きる上で「豊かな心」の必要性を感じている。音楽教育の中で「豊かな心」をはぐくみ、「生きる力」を育てるにはどうすればよいのか、考察する。

キーワード： 出会い、文化遺産の伝達、カタルシス、癒し、感性、生きる力

1 はじめに

歌の国イタリアでは、「よい声を聴くと寿命が10年延びる」と言われている。医学的に声が寿命を延ばすかどうかは分からないが、音楽の本場ならではの話である。イタリアに限らず、日本でもオペラを鑑賞した後の人を見ると、いかにも楽しげで生き生きしている。最近、「音楽は心のビタミン剤」というフレーズをよく目にするが、悲しいときや落ち込んでいるときに音楽を聴くと、確かにビタミン剤かドリンク剤を飲んだ後のように、いつの間にか元気を取り戻していることがある。このように音楽には、人間の心に直接作用する力がある。今日では、このような音楽の力を医療にも役立てようと音楽療法での研究も進められているが、我々も日常から音楽を聴き、歌を歌い、楽器を演奏したり、曲を作ったりすることで、無意識のうちに自分の心を癒し、活力を与えようとしている。

21世紀に入り、より一層国際化や情報化が進み、高齢化や少子化などの社会問題が深刻化している。連日マスコミから報道される暗いニュースは、ますます複雑になっていく社会に「傷ついた心」が多く存在することを証明している。幸い、年末・年始のテレビでは「第九」の演奏会をはじめ、「紅白歌合戦」や「ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサート」などの音楽番組が放映されている。これらは年の変わり目に際して、音楽とともに1年を締めくくりたい、また、新たな気分で1年を始めたいなど、多くの人々の心の中に音楽への求めや願いがあるからである。

音楽のもつ様々な力に焦点を当て、生活の中に音楽を生かし、生涯に渡って音楽を希求し、愛好する心をはぐくむ音楽教育の在り方について、また、様々な活動を指導する音楽科教師の役割について考える。

2 研究目的

音楽のもつ様々な力を分析することによって、音楽教育における「生きる力」について考察する。また、音楽科教師の役割について再考し、「生きる力」を育てる指導法について考察する。

3 研究方法

- (1) 音楽についての考察
- (2) 音楽教育についての考察

4 研究内容

(1) 音楽との「出会い」

人と音楽との出会いは様々である。テレビやラジオのスイッチを入れると、いつでも音楽が流れてくる。また、巷にはCDやDVDなどの音楽ソフトが氾濫し、インターネットや携帯電話からでも流行の曲がすぐにダウンロードでき、わざわざコンサート等に行かなくても、いつでも簡単に好みの音楽を入手し鑑賞することができる。このように我々は現代の社会において、毎日、驚くほど容易に音楽と出会っていると言える。しかし、その中で深く心に残る出会いはいくつあるだろう。音楽に出会ってのようにみえても、実はすれ違いばかりなのではないだろうか。

毎年、高校の新生から過去にどのような音楽教育を受けてきたのかを把握する目的でアンケートをとっていた。その結果、子どもが小学校や中学校で、どんな歌を多く歌ってきたのか、また、器楽には多く取り組んできたのか、作曲は学習したのかなどの傾向を把握することができた。そして、生徒の音楽的な興味・関心のほか、かかわってきた教師の音楽的な嗜好や得手不得手も伺うことができた。決して多いとは言えない音楽の授業時数で、「表現」や「鑑賞」のすべてにわたる学習を網羅することは難しい。しかし、限られた時間であればこそ、できる限り多くの感動的な出会いを経験させるための工夫が必要なのではないだろうか。

学校では、授業のほかに発表会や卒業式など様々な音楽活動の機会があるが、教師はいつも子どもに「印象的な出会い」を経験させているだろうか。「表現」や「鑑賞」の領域での学習で、子どもがそれ相応に音楽と出会うことは可能である。しかし、音楽との出会いの中で印象深い「感動体験」だけが永く心に残る。そして、その音楽はその場面とともに鮮烈に記憶され、子どもの新たな感性として蓄積されていく。このような感動的な出会いを多く体験させるために、まず、音楽との出会いについて分析する。

以下、音楽との「出会い」には、どのようなものがあるか記述する。

- ① 歌曲との出会い……歌のメロディや詩情に触れることにより、歌曲の魅力を発見する。
- ② 声楽との出会い……声の出し方（発声法）を工夫することにより、今までの自分にはなかった声を発見し、歌う喜びを見いだす。
- ③ 合唱との出会い……声楽的によく響く声で歌う楽しみとともに、声をハーモニーさせる喜びやハーモニーに浸る喜びを見いだす。
- ④ 作曲家との出会い……作曲家のもつ独特なメロディやハーモニーなどで構成される芸術の世界を発見する。
- ⑤ 楽器との出会い……いろいろな音色や表情をもった楽器の音楽や奏法に興味や関心をもつ。
- ⑥ 合奏との出会い……独奏では味わえない、他の楽器などと合わせる楽しさを味わう。
- ⑦ 音楽鑑賞との出会い……音楽の歴史や作曲家などについての知識を得て、創造的な音楽芸術のよさや美しさを体験し味わう。
- ⑧ オーケストラとの出会い……多くの奏者による壮麗なシンフォニック・サウンドに興味や関心をもつ。
- ⑨ オペラ・オペレッタ・ミュージカルとの出会い……声楽・演劇・バレエ・オーケストラ・舞

台・照明などを合わせた総合芸術の素晴らしさを発見する。

- ⑩ 演奏との出会い……発表会等で歌を歌ったり、楽器を演奏したりする喜びを見いだす。
- ⑪ 創作との出会い……音楽のしくみを学び、歌曲や器楽曲などをつくる喜びを見いだす。

以上のように、音楽の授業において多くの出会いが考えられるが、その一つ一つが常に新鮮で印象的であり、感動的なものとなるよう工夫を凝らさなければならない。

(2) 教師は「出会い」の演出家

教師は、子どもにどのような出会いを提供しているか。教科書の歌を歌い、楽器を演奏し、楽曲を鑑賞することで音楽との出会いは成立する。しかし、その出会いがいつも印象的かつ感動的であるとは限らない。子どもに感動を与えるためには、教師自身がいつも感動と出会っている必要があると考える。なぜなら、音楽の素晴らしさを身をもって体験していない教師に、その素晴らしさを伝えることは極めて難しいからである。音楽の感動は、教師の感動した心から発せられる言葉や表情によってのみ伝えることができると考える。

子どもには、絶えず音楽への期待と憧れがあり、授業に新しい発見を求めている。したがって、教師はその求めに答えなければならない。幾度かは期待を裏切ってしまうときがあるかもしれないが、期待はずれが続くと子どもは多くを求めなくなる。そうなると、子どもの姿勢は消極的になり、自主性や自発性も姿を消し、義務感だけが残ってしまう。音楽の授業で子どもから笑顔が消えているのはこのような状況が多い。

以下、笑顔が消えた「感動の少ない授業」について記述する。

- ① 教師や子どもの感覚の中に音楽（メロディやハーモニー、リズムなど）が流れていない。
- ② 教師自身に感動がなく、感動を子どもに伝えようとしていない。
- ③ 教師自身が音楽の諸活動をする喜びを感じていない。
- ④ 教師に子どもが感動する姿を見る喜びがない。
- ⑤ 単に歌ったり、演奏したりするだけで、子どもの感性に働きかけない。
- ⑥ 知識伝達と感性育成のバランスや組み立てが悪い。
- ⑦ 知的理解が中心で、感覚的に納得し満足することが少ない。
- ⑧ 新しい発見や印象に残るものがない。

以上、指導案を立てる際にも、実際の指導においても期待はずれにならないために留意したいことである。

また、子どもには、できる限り低学年からよい音楽との出会いを体験させ、多くの感動を経験させる必要がある。難解なものは避けるべきだが、幼いからといって幼稚なものばかり与えてはならない。題材等がふさわしいものであれば、硬いものを母親が噛んで子どもに含ませるように、難しい音楽でもうまく手ほどきすれば十分理解させることができる。肝心なことは、教師が得た感動を子どもに合うかたちに工夫して伝えることである。

(3) 音楽科教師の役割

ア 生徒の好きな曲

高等学校の新入生に対するアンケートとともに実施した鑑賞テストから、意外な結果を得た。この鑑賞テストはクラシックの名曲の中からポピュラーな20曲を選び、1分間程度その曲の有名な部分を鑑賞させ、曲名と作曲者を答えさせるものである。そして同時に、その曲を以前から知っていたか、また、好みの曲であるかも答えさせるものである。毎回のアンケート結果から、「生徒が好きな曲」は、「生徒が知っている曲」であるということが分かった。例えば、「魔王」は

芸術的には素晴らしい作品だが、最後には子どもが父親の腕の中で死んでしまうという悲痛な内容のバラードである。この種の歌曲は、疲れているときにはあまり聴きたくない曲であるが、「嫌い」と答えた生徒はほとんどいなかった。逆に、交響詩「はげ山の一夜」は、知っている生徒も少なく、その不気味さからか、名曲であるにもかかわらず「嫌い」と答えた生徒が多かった。その他、「運命」や「第九」「春」など教科書で学習した楽曲は、曲名や作曲者ともよく知っていて、好みの曲であることが分かった。この結果、「生徒が好きな曲」とは、内容や曲想にあまり関係なく、学校で習っていたり、テレビやラジオでよく耳にする、いわゆる「生徒の知っている曲」と言える。

イ 文化遺産の伝達者

学校教育の大きな目的の一つに、「文化遺産の伝達」がある。古今東西の名曲の数々、これらはすべて人類の偉大な文化遺産である。しかし、音楽科教師がその偉大な遺産である作品のどれほどを子どもに伝えているのか、はなはだ疑問の残るところである。決して現代のポピュラーソングや歌謡曲などを否定するものではないが、子どもの名曲の知らなさには驚かされる。子どもは、クラシック音楽についての情報の大半を学校の授業から得ていると言える。したがって、教師がどれだけ文化遺産である名曲の価値を把握しているかが重要な鍵となる。言い換えれば、教師が名曲の価値を十分把握して指導することにより、子どもの中に名曲のよさや美しさを味わう喜びや楽しみが芽生え、やがてそれが子どもの生涯の財産となり得るのである。

現行学習指導要領では、各学校における自主的な創意工夫を促進するため、特に鑑賞の共通教材が示されず、教材の選択が広がった反面、教師による偏りも見られる。その結果、子どもには教師が取り組まなかった領域についての欠落が見られる。また、その欠落した部分については、次に何らかの出会いがない限り、決して埋められることはない。例えば、教師がモーツァルトについてあまり知らないとする、その学校の子どものモーツァルトについてあまり知らないということになる。したがって、音楽教師の意識を高めるための研修内容や指導方法などについて工夫や改善をする必要があると考える。

(4) 音楽科の授業の留意点と工夫

授業の始まる前に、ある子どもがピアノで「猫踏んじゃった」などの曲を荒々しく、あるいはたどたどしく弾いていたら、ほかの子どもの気分はどうだろう。教師自身も、授業前に指導内容などを確認している最中に聞こえてくる騒音？には、いらだちを覚えるかもしれない。恐らく、爽やかな落ち着いた気分で授業に臨むことは困難であろう。また、ゴミが落ちていたり、机や椅子が整頓されていなかったり、楽器などが乱雑に置いてあったりするような教室では、子どもの心もすさんでしまい、音楽の美しさや楽しさを味わう環境としては最悪のものと言える。

更に教師は、音楽の一つ前の授業が何の教科であったか、知っておく必要がある。例えば、「体育」の授業の後では多くの場合、子どもの息が上がっており、いきなり歌を歌うことは難しい。また、1時間目の授業では声が出にくいので、少し長いめにウォーミングアップする必要がある。昼食後の授業は眠くなることが多いので、鑑賞の授業の場合は眠くならない工夫が必要となる。

このように音楽の授業では、「何曜日の何時間目」という時間帯を考慮した指導案を作成する必要もある。

以下、音楽の授業の留意点とその工夫について記述する。

① 子どもの気分を高める工夫

ア BGMの活用……落ち着いた気分で授業を受けることができるよう、「今週の曲」「今月の曲」などとして授業の始まる前にBGMを流しておく。

イ 楽器の使用……子どもはすぐ楽器に触りたがるので、自由にさせると取り合いになったり、乱暴に扱ったりして收拾がつかなくなる。したがって、楽器の演奏は授業中と許可されたときのみにしておく。

② 音楽室の環境整備

ア ピアノ・机・椅子の位置やスピーカー・スクリーン等の向き・配置

- ・ピアノを置く位置や向きが歌唱指導等に適しているか。
- ・歌唱指導に机は必要か。また、椅子の並べ方は半円形の方が妥当ではないか。
- ・スピーカーの高さや向きが適切か。

イ 掲示物等の工夫

- ・音楽家などの絵や写真の掲示をしたり、花やクリスマスツリー（12月）などを置いたりして音楽教室が殺風景にならないよう工夫する。

③ 導入や展開における話題づくり

ア 授業の導入……「季節」「時事問題」「興味・関心事」「音楽」などの話題から本題に入る。

イ 話題の収集……教師は子どもが話題にしている「テレビ番組」や「音楽コミック本」などを把握しておく必要がある。決して子どもに迎合するわけではないが、その話題を掛け橋として、本題に誘導することができる。関連付けられる材料をいつも用意しておくことが大切である。

④ 音楽が生まれる空間としての音楽室

ア 授業における音楽会の楽しみ……音楽室はコンサートホールと考える。

イ 礼法・拍手……発表のときには演奏会のように礼を行い、拍手する。

以上のような留意点や工夫が、指導計画や指導案以外に必要である。

(5) 思いやりの心をはぐくむ音楽体験

音楽の諸活動が人を思いやる心と、どう結び付くかについて考えてみよう。合唱や合奏の活動で音楽的な能力が高められると同時に、友達のことを気遣ったり、クラスのために協力し合ったりすることができるようになる。これは様々な音楽活動で培った感性が、日常生活の中でも生かされるからである。

ア 子どもを否定する言葉

合唱などの授業では、まず楽しさが優先されるが、この段階で重要なことは子どもに意欲をもたせることである。教師はほめたり、励ましたりしながら楽しい雰囲気をつくり、子どもの集中力を高めていくが、絶対に避けなければならないことがある。それは、子どもの演奏を否定することである。子どもが発する音楽は、時として教師にとっては物足りないものである。しかし、多くの子どもは頑張ろうとしていて、嫌々であろうと指導に従おうと努力している。「～はダメ」「～は違う」などと否定するより、「～のやり方もある」「～してみよう」というように、肯定しながら新しい方向を見付けさせ、工夫させる指導が大切である。「子どもをけなさない」「子どものやる気をそがない」などの指導を肝に銘じる必要がある。

イ 道徳観念や人権意識を高める音楽教育

歌唱や合唱では、歌詞の付いた旋律を歌うが、歌詞や旋律が子どもの感情と深く結び付くとき、感受性は一挙に高まる。最終的に、音や声が美しく響き、調和することが指導の目標であるが、教師は完成された演奏をイメージして発声法や演奏法を指導していく。この指導の際、特に大切なのはハーモニー感覚でありバランス感覚である。これらの感覚の重要性については、音楽面と

同時に心理面についても言うことができる。すなわち、教師は音楽的な指導によって楽曲をまとめながら、クラス全体に親和的な雰囲気や協調性が生まれるよう指導するのである。教師はたいいていの場合、完成された楽曲のイメージを基に、不足している音楽的な諸要素を付加しながら、完成に近付けていく。ハーモニーの場合、どの音が強くても弱くても美しいハーモニーとして成り立たない。また、音色においては、色合いの微妙なニュアンスが音楽の陰影となる。テンポにしても、若干の差異が楽曲の雰囲気を左右する。いずれにしても教師が様々な指導を重ねることで、楽曲は完成に近付けていく。そして、そのことにより、子どもは音楽的なハーモニー感覚やバランス感覚を身に付けていくと同時に、友達のよいところや不備なところにも気づき、相手の気持ちや立場を理解しようとしたり、互いに認め合ったりして協調性を高めていく。ここで教師は、「音楽を教える」と「音楽で教える」ことの両面に意識を向けなければならない。人権教育や道徳教育が音楽教育と深く関連しているのは、相手の立場に立てる感性は音楽の感性にも通じているからである。音楽的なハーモニー感覚やバランス感覚は、まさに自然界共通の調和の感覚である。技術指導に偏ることなく、子どもが互いを思いやり、人間的なバランス感覚をもって心のハーモニーを築けるような音楽体験を積み重ねる必要がある。

(6) 音楽にみる癒しの力

心理カウンセラーによると、不登校の子どもに言うてはいけない言葉の一つに「頑張れ！」という言葉があるという。不登校の程度や言葉がけのタイミングなどで若干の違いはあるものの、これ以上頑張れず、挫折しそうになっている子どもにとっては、残酷な言葉かもしれない。このようにとき、子どもに必要なのは励ましの言葉ではなく、慰めの言葉であり、今の自分をありのまま受け入れてくれる人である。

ア 音楽におけるカタルシス

心身ともに疲れ果て、悲しみや苦しみのなかに沈んでいるときには、励ますような元気で明るい音楽は不向きである。むしろ、その気分と同調するような悲しく沈んだ音楽を鑑賞する方が適している。これは古代ギリシア時代に、悲劇の目的をパトス（苦しみの感情）の浄化にあるとしたアリストテレスのカタルシス（浄化）理論に共通している。この理論はギリシア悲劇において実践されていたが、悲しい音楽を聴き、涙を流すことによって心のしこりが浄化され、取り除かれるということは、古くから知られていたのである。

イ 「アダージョ」は癒しの音楽

現代に生きる我々も、気分が落ち込んでいるときには悲しい音楽を聴くなど、無意識のうちに音楽を選択して聴いている。音楽は傷ついた心に優しく触れ、悲しみや苦しみを少しずつ和らげながら癒してくれる。我々は日々、音楽による癒しの恩恵を受けて生活している。数年前、「カラヤンのアダージョ」というCDが大変な人気を集めた。「アダージョAdagio」とは、イタリア語で「ゆるやかに」または「静かに」という意味で、主に交響曲や協奏曲の第二楽章に用いられる速度用語である。また、第二楽章は緩徐楽章とも呼ばれ、静かで落ち着いた雰囲気をもった名曲が多い。この慰めに満ちた「アダージョ」を集めたCDがヒットする背景には、癒しを求めている現代人の姿があると思われる。

(7) 音楽のもつ大きなエネルギー

2006年はモーツァルト生誕250周年、いわゆるモーツァルト・イヤーである。モーツァルトは35年の短い生涯で600以上の曲を作曲したが、あらゆるジャンルにわたる名曲の数々は、現代において、ますます輝きを増しながら人の心に語りかけている。

モーツァルトの作品に限らず、音楽には直接、心に訴えかける力がある。また、音楽には国境

がなく、言葉による説明や理屈も不要である。音楽は決して強制的ではないが、圧倒的な力で聴き手の心に語りかけてくる。素晴らしい演奏に出会うと、充実感や満足感を味わうことができ、至福の時を過ごすことができる。また、まれに最上の演奏に遭遇すると、感動のあまり涙が止まらなくなる場合がある。これは聴き手の感激が極限に達した、いわゆる「感極まった」状態である。しかし、このような感動を多く得るには、CDやDVD等の音楽ソフトの鑑賞では不十分で、演奏会場等で生の音楽に接する必要がある。なぜなら感動の多くは聴覚だけでなく、視覚やその他の感覚を通して総合的に得られるものである。テレビやAV装置から視聴する鑑賞は、あくまで疑似の体験であって、本来は、演奏者と同じ空間で音が共鳴するのを実感すべきである。「感性」は耳からだけでなく、体全体で体感して育つものである。

ヨーロッパの多くの国々では、日ごろから音楽や演劇などを身近なものとして、コンサートホールや歌劇場、教会などで親しむ習慣がある。そういう意味で、彼らは生の音楽からくる感動をいつも享受している。インスタント食品の需要の多い日本では、音楽も即席なもので間に合わせる傾向があるのではないだろうか。

5 研究結果と考察

教師は指導者として常に研修が必要であり、音楽科教師は、日ごろから声楽やピアノなどの技術面のレッスンと鑑賞などに関する自己研修が不可欠である。これらを怠ると、感動が少なく、音楽のもつ力を十分に発揮できない授業になってしまう。感動を吹き込むことができない形式的な授業や、知識が少なく新鮮味に欠ける授業は、子どもの感性に働きかけることが少なく、「生きる力」を育てることもむずかしい。教師は、学生時代に学んだ技術や知識のみに頼ることなく、自らの研修を通して得た感性で子どもの指導に当たるべきである。そして、授業のあらゆる一コマが、「生きる力」と結び付いているかを吟味する必要がある。音楽科教師には、授業の一瞬一瞬を感動に換える力量が要求されている。

6 おわりに

日本の下手とヨーロッパの下手には大きな違いがあると感じている。一言で言うと、日本の下手は面白くない。また、個性が見えにくく、オリジナリティーが感じられない。それに比べてヨーロッパの下手は一生懸命に表現しようとして、個性的で面白い。表現は整理されていないが、そこには荒削りではあるが確かな個性が存在する。つまり、日本人の演奏の多くは、本人の感性から発せられるメッセージに乏しいため、個性があまり表れず、主張の弱いおきまりの演奏となっている場合が多いと言える。その結果、芸術的にはある程度、洗練されて聞こえるが感動の少ない演奏となっている。このような現実は、ある意味で日本におけるこれまでの音楽教育を象徴していると言える。つまり、子どもの感性に働きかけることを優先せず、表面的な形のみを整える画一的な教育からは自発性が生まれず、創造性や独自性が育たなかった。その結果、閉じこめられた個性の上に形成された物まね的な演奏しか生まれてこなかったのである。

音楽における「生きる力」とは、単に音楽の表現に必要な知識や技術を身に付けることではない。様々な音楽を受け入れ、自ら感じ取り、自ら創造することのできる感性を培うことが最も重要なことである。一人一人の感性を高めながら、豊かな個性を引き出すことに焦点を合わさねばならないと考える。